

シンゴ・ヨシダ

【ヨシダさんは各地を旅しながら制作されていますが、ベルリン滞在も長い視点のなかの一部でしょうか】

フランスの友人たちと、東ドイツ時代の元秘密警察・諜報機関シュタージの大きな建物の一階を破格の値段で借りられたのが、ベルリンに来た最初のきっかけです。その後文化庁の海外研修に参加し、長期滞在に繋がりました。当時は、格安航空会社でベルリンを軸に世界各地へ飛んでいけるようになり、この街が本当の首都に変化しつつある毎日に興奮を覚えました。

さまざまな国から大勢の人が新しい可能性を求め挑みにくる、熱気に満ちた都市であると同時に、自然豊かな田舎であり、時間がゆっくりと流れるような雰囲気は作品制作に集中しやすい環境でした。一方、賑わう中心地を離れた旧東側地域では、まるで時間が止まっているかのようで、とても不思議でした。ベルリンの社会が今までの概念、価値観、働き方、生活、社会などの変化を迎合していくのか、その時代を実感し、観察できたことが嬉しかったです。

「旅をしながら制作する」のは、2003年頃フランスでの学生時代に発表したビデオ・パフォーマンス作品がきっかけで、現在に至ります。それは、トランクを投げた方向に旅に出て、常識の異なったさまざまな世界へ行くというものでした。自分の存在価値やアイデンティティを自問自答し、人種、国籍、国境、経済、社会、貧富、権力、体制、秩序、常識など、世の中の不条理に対して憤りを感じながら、本質や真実を問う。ただ、人の家に土足で上がって他人を批判し、自分の考えを押し付けてはならないというルールを基本に、あくまでも対話（Dialogue）のきっかけを作る仲介人として、また、社会を観察する探偵のようなアーティストになるのが目的でした。

ベルリンでの生活は今年（2021年）5月に終え、フランスに戻ります。理由は特になく直感でしょうか。ドイツ社会に溶け込むまでに立ち足はかかる「壁」が、自分にとっては大きすぎることに気付いてしまった頃、ちょうど昔の友人たちからも声がかかったので、そろそろかな、というところです。

【海外で生活、制作してみて日本との違いや長所、短所はありますか】

日本社会は細かいルールが年々厳しくなり、少し息苦しく感じますが、それ故に社会秩序が保たれ、安全性、清潔さ、信頼関係、他者への敬意、優しさなど団結力がある国民性は素晴らしいと思います。しかし、今後、生まれも育ち—いわゆるイデオロギーや倫理—も異なる人々など多くの外国人が移住し始め、本当の意味でのグローバル社会になった時に、大きな衝突や差別が今以上に表面化する時期が必ず訪れるでしょう。

歴史を振り返れば、日本国内でも多くの差別があったし、人種に起因する差別も存在しています。「人種問題は地続きの大陸の問題であり、島国にとっては遠い話だ」と目を逸らし、受け身の姿勢でどうにか上手くいっていた生活も、国際化によってより一層自己判断に迫られるでしょう。そのためにも、平和や戦争の問題、難民問題などの国際的な問題や社会秩序を学び、「異文化」を受け入れる教育が必須だと考えます。

特に海外が素晴らしいわけでは全くありませんし、基本的に他人を信用しない社会なので、日常生活は常に空気が張り詰めた緊張感があります。多民族国家のため、各々の常識が通用しない分、人にあまり求めず、期待しないされないことが僕自身には心地が良いです。

それを踏まえ、制作する上での日本との違いは、前例主義の有無だと思います。海外でも未知のことに対して躊躇される場面もありますが、面白いね、興味深いね、と前向きに捉えてくれる感じがします。それは互いに理解しづらい文化の違いからくるものかもしれません。

【昨今の世界を取り巻く新型コロナウイルスや社会の分断などは、制作に影響がありましたか】

毎回プロジェクトを進めるときには、何らかの障害や制限はつきものなので、ある程度は慣れていますが、パンデミックによって2週間ごとに国境の状況が変わるため、旅行計画を立てるのが本当に難しいです。しかし、視点を変えれば興味深いことや滅多にないチャンスもあります。日本の「GO TO キャンペーン」も利用しましたし、飛行機の日程変更も融通が利いて電車に乗るみたいに便利でした。

国によっては夜間外出禁止という厳戒態勢ですが、非日常を感じたい好奇心が勝り、こっそり夜中

に出歩いたりもしました。自粛期間中とはいえ、旅行はできるので、イギリスの最初のロックダウン中には、わざとロンドンを経由地として選んで、廃墟同然の異様な雰囲気ヒースロー空港を独り占めしたように探索したりもしました。

【今回、映像作品に加え、写真作品とドローイング作品を組み合わされましたが、どのような空間構成を意識しましたか】

ドローイングは、写真／映像作品とは別に、撮影した場所で得た感情や経験などを日記のように、いわゆるオートマチズムのような手法で描きながら、自分の心理的内面のアイデンティティを表現し、自分自身をより一層理解するために並行して制作してきた試みです。タイトルの「エニグマティック」は、描いた本人にとっても謎めいて不思議で不可解という意味合いです。

映像／写真作品などと全く違ったスタイルというのに困惑を受ける方もいると思います。無論、絵画などを専門に活動している方々から見れば上手な絵ではないかもしれませんが、誰しも、アールブリュットの狂気や内側から湧きあがる衝動が存在すると思うのです。

この両極端を見せることに賛否両論あることは承知していますが、新しい副次的効果が現れることを期待して、展示空間を作りました。

【特にエニグマティックの1点はコラージュとして構成されました。絵葉書やミステリアスな小箱、映像にも現れる白馬の写真など、いかにも不思議な雰囲気を醸しています】

自分の作品のひとつに「ポストカード」というプロジェクトがあります。いわゆる絵葉書というのは、遠く離れた人々とのコミュニケーション手段であったり、又は人々が訪れた場所の思い出を綴ったりしたもので、人生の一刻を別の場所にいる誰かと共有したいという願いが込められています。そういった過去の使い古しの絵葉書にとっても興味があり、古い絵葉書にある風景を訪れたり、歴史的な場所や、差出人もしくは受取人の住所を求めて徒歩で移動したりして、そこに書かれている過去と現在の繋がりを探索しながら確認します。絵葉書に隠された過去のストーリーと現在とのシンクロや比較によって、「もしかしたら」何かが生み出される可能性を孕んだ憶測的調査でありドキュメンタリー制作活動です。そのポストカードプロジェクトのアイデアをベースに、今回は、自分がフランスとスペインの国境沿いにあるバウゼン集落を訪れた時の記録や記憶の個人的なドローイング、小箱、映像など、その現地で得た事実の断片をもとに、鑑賞者に各々のストーリーを組み立ててもらえるよう制作しました。

【バウゼンにも新型コロナウイルスの影響はあったのでしょうか。また、実際にホールツの面影など感じたことはあったのでしょうか】

バウゼンは村よりも小さい人口40人程度の集落なので、外部との接触もほぼ無く、感染者は出なかったということですが、友人が言うには新型コロナの影響による隔離ロックダウンの時は一歩も外に出られず、誰もいない森にさえも出歩きにいけない状態が数週間も続いたそうです。その頃は、警察らがスペインとフランス全土で一全く人気のない森の中までヘリコプターを使って相当厳しい取り締まりを行っていたそうです。彼らが息抜きに森に散歩に出かけた時には、警察から必死に逃れるために森の近くに止めた車の中で息を潜めて隠れたほどだと話していました。

ホールツの面影については、きっと昔の人は登山中に森や木などが顔に見えたりする錯覚を夜道に見て「ホールツ」を想像したのだろうと友人と話し合いました。日本ではアイヌの伝承に登場する小人「コロボックル」や、森に存在する「もののけ」「妖怪」が同類の現象だと思います。また、北欧アイスランドには事実「妖精遺産保護法」があります。国民の半分が妖精の存在を信じていると言われ、「エルフのたたり」があるとかで「エルフの岩」を避けて国道が整備されています。いわゆる日本の神道に相似する信仰、つまり我々が自然と共生していくための自然と人間の付き合い方ということだと思います。